

## 安曇野屋敷林見学ツアーに34名参加

7月25日(日)安曇野の屋敷林見学会を行なった。34名参加し、予定したコースの見学、鑑賞でそれぞれ楽しい思い出を作った。

安曇野の屋敷林の代表格二軒の見学、遠望のきく「室山」での昼食、大王ワサビ、ちひろ美術館での絵の鑑賞と夏の安曇野盆地を走り、沢山の空気をいただいた。現地で場々洋介、等々力秀和、木船潤一の各氏や安曇野市役所の皆さんが案内。又、当日の交流会を信濃毎日、市民タイムスが取材報道した。



松岡さん宅 ご主人に説明を聞く

### 見学した二軒の屋敷林———松岡澄夫宅と中沢友直宅

〈松岡淳夫さん宅〉

- ・屋敷林面積1,500坪(50a)、安曇野屋敷林2,000余の中の筆頭。
- ・古いケヤキ6本を中心に森の形をつくる。母屋の前に2本のケヤキが立つ(門ケヤキ)。樹幹と根元、根の張り方から時代の重みが伝わる。風対策で何度も枝が落とされ、その大きな傷あとが痛々しかった。また庭の真中のケヤキにはフジが巻き付き、初夏遠方から見られる花は見事だと。
- ・古い直立するハウノキの堂々とした姿と、大ケヤキを支えるようにスギ、ヒノキ、イチイが配置される。
- ・樹齢400年のケヤキを中心に全体で、平地の森をつくり、山と田を繋いでいる。景観も、松岡宅から見あげられる常念岳の遠望は絵の世界だ。
- ・松岡さんの話し

木を大事にしているのは、安曇野の景観のためだ。開発と裏腹に森が存在する。屋敷内の「ホコラ」の後ろの木が倒れたので、また次代のケヤキを植えた。平地の森は地域の環境として役立ち、安曇野の値打ちを高めている。ただ一切の維持は個人で負担しているが、ここが大変なことだ。

- ・馬々さんの説明  
維持は個人の責任となっている。しかし現実には屋敷林があって安曇野の値打ちがある。早く共有財産にしたい、今市民がどんな手伝いができるかだ。
- ・参加者の質問に応じて松岡さん談  
家内と二人で掃除をする。一週間かけ年2~3回やっている。落葉の始末が大変。また枝おろしに費用がかかる、クレーン車も使い3年に1回やっている。虫の駆除はしない。除草剤を年に2回散布する。樹木は全て先代からのもの、私はケヤキ1本を植えた。30代以上続いている家だ。雪は60cmくらいで風はあまりない。

〈中沢友直さん宅〉

- ・敷地面積1,500坪(50a)で江戸中期に建てられた間口10間の母屋がある。母屋北側の庭と池は広く大きい。外側の塀がシンプルで重厚さがたがう。庭木の手入れが入念。
- ・コウヤマキ、ヒノキ、スギ、マツ、モチ、ハクモクレンの組み合わせだった林。南側は、道路拡幅で昔からの樹木はなくなっている。北側から西側の樹木が安定している。
- ・風は南西方向から吹くが大風は少ない。
- ・手入れのゆき届いた庭木中心の屋敷林の家。
- ・中沢さんの話し  
災害の少ないところで台風被害はほとんどない。相当古い家で、長年大庄屋をやってきた。庭木の手入れに年間約150万円かかる、落葉は燃やせない。除草剤は少し使っている。屋敷内の「ホコラ」は三ツ峯神社の御神体をまつっている。



中沢さん宅 ご主人に説明を聞く

## ○馬々洋介さんの案内(バスの中での)

- ・安曇野の屋敷林は雄大な北アルプスを背景にしている。白壁の蔵と田園風景と屋敷林の組合せは特有の景観。
- ・屋敷林はアルプスからの防風林。現代の認識として、人と鳥、昆虫等の共同生活の場でCO<sub>2</sub>吸収源である。
- ・屋敷林の特徴
  - ①種類が多い ②100~600年生きた時代の証人 ③落葉処理、日陰問題で切られている。
- ・安曇野の屋敷林の値打ち
  - ①自然環境の創造 ②歴史的景観の継承 ③安曇野のシンボル



参加者全員で(室山)

〈柏樹代表幹事の帰りのバスの中での挨拶要旨〉

- ①往復7時間のバス乗車で二軒の屋敷林を見せてもらった。
- ②松岡、中沢さんの屋敷林をみて
  - ・樹齢の重み、庭として地域と樹木の組合せ、いずれも古い歴史をもち、人と関わり生きてきた木からの歴史にふれた。
  - ・安曇野の風土をつくる一つの因子の中身にふれることができた。
  - ・屋敷林の手入れと費用のかかる現実は共通のテーマ。
  - ・樹種の組合せ——ヒノキ、ケヤキ、スギ、イチイ、ホウ、マツが主木。
  - ・松岡さんの言葉  
山と川と平地の屋敷林がつくった安曇野風土・景観だ。  
その一角の屋敷林の維持が難しくなっていることは、安曇野のイメージにもまた「響き」もなくなる。ぎりぎりの思いで付き合っている。現代人の考えあう時だ。
- ③砺波のカイニヨをどうみるか、松岡さんの言葉を広げかみしめたい。
- ④10/23 全国屋敷林フォーラムを計画しているが、ぜひ参加いただき、前向きの中身になる集会にしたい。

## 「散居とカイニヨ」の雑感

加藤悦夫(高岡市戸出春日)

充実感のある旅であった、生活空間を超えて新しい空気に触れたことか。また、圧倒する大木、数百年の生命力の存在に出会った感動か。熱暑の爽やかな旅として心に残った。

「散居とカイニヨ」様々な切り口があるだろうが、それが観光なんですか？と敢えて竿をさす。極論だが、観光産業に違和感を感じず。100%消費の観光が物を生み出す産業という「語イ」に対してである。土産物など物を作っているのではないかとの言もあるが、観光の実感は貧しい。何よりも内容が貧しい。ゆっくり時間をかけ、旅行の光や風、人にふれる。その中に私が投影される。そんな旅は夢か。

観光地にしても然り、如何に人を寄せるかのうすっぺらな仕掛けだけである。過日、有峰で一泊した。祐延ダムや大和多峠の周辺が、下界の公園と同じようになっているのに落胆した。大きな自然を売り物にしたいなら、人為的なものは遠慮したほうが良い。

散居村ミュージアム(田空構想)も、疑念や批判もあったと聞くが、地元的生活感、歴史観を踏え、立体的に参画、今日に至っているのではないかと思う。

現実を生き、先を洞察する知恵が、今日のミュージアムの姿である。国、県、市の施策は、地域でまず生産する事。農業でいえば商品をつくるのではなく、命を繋ぐ食べ物を作る、損得の計算の前にまず作る。作ってこそ農業である。

それは、二次産業も然り、人は控え目に心豊かに生きて行くために、生産活動をするので、マネーゲームや巨万の富を築くためでもない。

「散居とカイニヨ」では、散居の形はなかば永久的だろう。新しい住宅団地もみられるが、砺波一円の容量には限界がある。問題は、「カイニヨ」、自然の樹木に対する価値観が問題である。家と屋敷は生活の場ではなく「ねぐら」になっている。ほとんどが終日、外稼ぎ、カイニヨにふれる暇がない。

この現実に、原則論をかみ合わせ、試行錯誤をおそれず実践することではないか。

「能登の千枚田」も人の生きてきた、歴史遺産であり、今は行政の支援で伝えられている。

なぜ「カイニヨ」かを学術、人文地史など多方面から探求し、営みを持続し、次世代の中へ組みこんでゆくことである。ミュージアムの児童の撮影した、カイニヨ写真展は大いに広めていくことだと思われるし、ライトアップの取り組みも面白い。又、カイニヨ写真展の出前講座もより。

色んなところから屋敷林をとりあげ、地域全体のものにしていくことであろう。

その中心が「カイニヨ倶楽部」では、荷が重い。人的・経済的な保障が、制度・仕組みとして必要と思われる。